Ⅱ　意識調査から見られる子供たち

前年度の研究では「気がかり群」（不安・抑うつ感が高く、同時に自暴自棄感も高い。さらに、家族または友達から十分支えられていない群）を抽出してその傾向を見た。「気がかり群」は、危機的な状況に陥っていると思われる子供たちであるが、今回の調査では、全調査対象者の 2.4%に当たり、1 学級 40 名とすると、各学級に 1 名弱の生徒がいる割合になる。「気がかり群」のような行動（特に自傷行為や対物攻撃）を取る生徒がいたならば、周囲の者も無視できないが、現実には、一見普通に過ごしているように見えて、実は内面でかなり不安定な子供たちが多いと思われる。このような子供たちは見過ごされがちで、事件・事故が発生して、はじめて気付かれることも多い。

本年度は、「気がかり群」ほどではないが「気がかり群」の周辺にいる子供たちを「予備群」とし、「気がかり群」「予備群」そしてそれ以外の「一般群」の三群に分けて、子供たちの傾向を見ることにした。

1　気がかり群の周辺にいる子供たち

(1)　「予備群」の設定

「気がかり群」と「予備群」は表 1 のような範囲を基準とした。

表 1　「気がかり群」「予備群」の作成基準

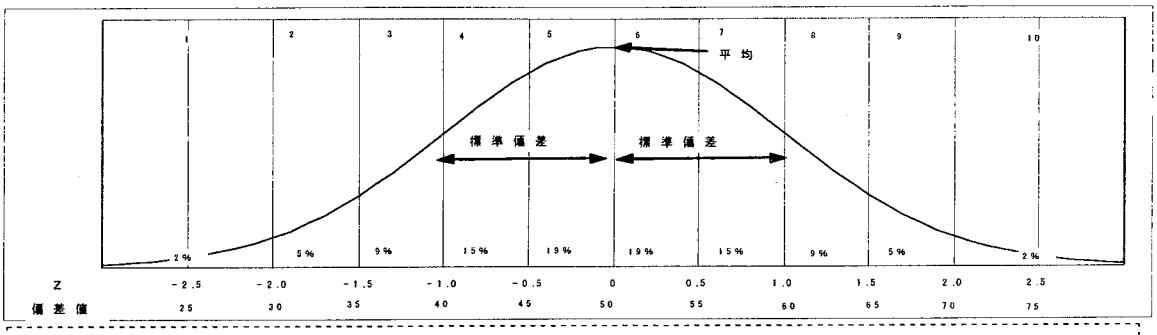
作成基準 ＼ 因子	気がかり群		予備群（気がかり群を除く）	
	統計範囲	得点範囲	統計範囲	得点範囲
不安・抑うつ感	1.0≦ z	18～21 点	0.5≦ z	16～21 点
自暴自棄感	1.0≦ z	6～9 点	0.5≦ z	5～9 点
家族親和感　または	z ≦－1.0	0～5 点	z ≦－0.5	0～7 点
友だち友好感	z ≦－1.0	0～4 点	z ≦－0.5	0～5 点

「気がかり群」は、「不安・抑うつ感」「自暴自棄感」の因子得点がいずれも平均より 1.0 標準偏差以上高く、かつ「家族親和感」または「友だち友好感」の因子得点が平均より 1.0 標準偏差以上低い子供たちで、この子供たちは不安な気持ちが強く、落ち込むことや自暴自棄的な感覚になることが多い。一方で、家族または友達から支えられているという感覚が薄く、非常に危機的な状況にある子供たちと言える（標準偏差については、P.4 注 1 参照）。

「予備群」はそれぞれの因子得点の幅を広げ、「不安・抑うつ感」「自暴自棄感」のいずれも平均より 0.5 標準偏差以上高く、かつ「家族親和感」または「友だち友好感」が平均より 0.5 標準偏差以上低く、その中から「気がかり群」を除いた子供たちである。「気がかり群」ほどではないが、平均的とは言えず、「気がかり群」に近付きつつある危うい群ということができる。「予備群」は 147 名で全体のおよそ 4.8%を占め、1 学級に 2 名弱いることに相当し、「気がかり群」と合わせると 1 クラスに 3 名余りとなる。

この二群以外の残りの子供たち（2,824 名）を「一般群」とした。

（注１）



標準偏差とは、分布の広がりを示す測度の一つである。平均値との差（偏差）を２乗し、それを算術平均した値の平方根として求める。

上図のような正規分布の場合、標準偏差ｚ値が１以上になる割合は、16%、標準偏差ｚ値が 0.5 以上になる割合は、31%になる。

(2)　各群の属性

「一般群」「予備群」「気がかり群」の学年別・性別内訳を表２～４に示す。

表２　一般群　(名)

	男子	女子	不明	計
中１	300	299	2	601
中２	300	286	2	588
中３	226	235		461
高１	193	208	1	402
高２	198	194	2	394
高３	184	183	1	368
高４	4	6		10
計	1405	1411	8	2824

表３　予備群　(名)

	男子	女子	不明	計
中１	5	12		17
中２	10	12		22
中３	14	16	1	31
高１	15	10		25
高２	17	18		35
高３	10	7		17
高４				
計	71	75	1	147

表４　気がかり群　(名)

	男子	女子	不明	計
中１	1	10		11
中２	4	3		7
中３	5	6		11
高１	6	10		16
高２	4	8	1	13
高３	6	9		15
高４	1			1
計	27	46	1	74

「予備群」は、中学生は 1,749 名中 70 名で 4.0%、高校生は 1,296 名中 77 名で 5.9%と高校生が高くなっている。また、男女別に見ると、男子は 1,503 名中 71 名で 4.7%、女子は 1,532 名中 75 名で 4.9%で大きな差はない。

一方「気がかり群」は、中学生は 1,749 名中 29 名で 1.7%、高校生は 1,296 名中 45 名で 3.5%と高校生の割合が倍近く高くなっている。また、男女別に見ると、男子は 1,503 名中 27 名で 1.8%、女子は 1,532 名中 46 名で 3.0%と女子が高くなっている。

この結果から、中学生よりも高校生、男子よりも女子の方が危うい状態にあると言える。

2　「一般群」「予備群」「気がかり群」の比較分析

「一般群」「予備群」「気がかり群」は、意識調査の結果にどのような違いがあるのか検討する。

(1)「自己肯定感」因子と「攻撃性」因子

意識調査の結果では6因子が抽出されており、「予備群」「気がかり群」を抽出するために用いた4因子以外の「自己肯定感」因子と「攻撃性」因子について、その得点分布を比較検討する。

①　「自己肯定感」因子の得点分布

三群について、表5～7に示す。

表5　「一般群」

点数	度数(名)	割合(%)	群(%)
0	95	3.4	低群 15.9
1	109	3.9	
2	244	8.6	
3	340	12.0	中位群 71.1
4	534	18.9	
5	521	18.4	
6	359	12.7	
7	255	9.0	
8	181	6.4	高群 13.0
9	108	3.8	
10	35	1.2	
11	18	0.6	
12	25	0.9	
計	2824	100.0	100.

表6　「予備群」

点数	度数(名)	割合(%)	群(%)
0	13	8.8	低群 40.8
1	21	14.3	
2	26	17.7	
3	27	18.4	中位群 55.1
4	15	10.2	
5	23	15.6	
6	10	6.8	
7	6	4.1	
8	1	0.7	高群 4.1
9	1	0.7	
10	3	2.0	
11	0	0.0	
12	1	0.7	
計	147	100.0	100

表7　「気がかり群」

点数	度数(名)	割合(%)	群(%)
0	20	27.0	低群 60.8
1	13	17.6	
2	12	16.2	
3	10	13.5	中位群 33.8
4	4	5.4	
5	3	4.1	
6	5	6.8	
7	3	4.1	
8	2	2.7	高群 5.4
9	1	1.4	
10	1	1.4	
11	0	0.0	
12	0	0.0	
計	74	100.0	100

「自己肯定感」因子の得点分布は、0点～12点の範囲で、全体平均は4.7点。1.0標準偏差以下の得点は0～2点の範囲となり低群とした。全体平均より1.0標準偏差以上は高群、その間は中位群とした。

「自己肯定感」因子について、12点満点中0～2点の低群（自己肯定感の全体平均よりも1.0標準偏差以上低い＝かなり低い群）の割合に注目すると、「予備群」は「一般群」の2倍以上に増え、「気がかり群」になるとさらにその割合は高まる。このことから、周囲の支えが感じられない中で、不安感や抑うつ感、自暴自棄的な気分が増している状況と、本人の自信のなさとは、密接な関係にあると言える。

② 「攻撃性」因子の得点分布

表８ 「一般群」

点数	度数(名)	割合(%)	群(%)
0	37	1.3	低群 13.7
1	32	1.1	
2	73	2.6	
3	90	3.2	
4	155	5.5	
5	221	7.8	中位群 73.7
6	308	10.9	
7	342	12.1	
8	337	11.9	
9	379	13.4	
10	290	10.3	
11	205	7.3	
12	168	5.9	高群 12.6
13	82	2.7	
14	44	1.6	
15	61	2.2	
計	2824	100.0	100

表９ 「予備群」

点数	度数(名)	割合(%)	群(%)
0	0	0.0	低群 5.4
1	0	0.0	
2	1	0.7	
3	0	0.0	
4	7	4.8	
5	4	2.7	中位群 67.3
6	8	5.4	
7	20	13.6	
8	10	6.8	
9	24	16.3	
10	14	9.5	
11	19	12.9	
12	15	10.2	高群 27.2
13	10	6.8	
14	4	2.7	
15	11	7.5	
計	147	100.0	100

表 10 「気がかり群」

点数	度数(名)	割合(%)	群(%)
0	0	0.0	低群 0.0
1	0	0.0	
2	0	0.0	
3	0	0.0	
4	0	0.0	
5	1	1.4	中位群 50.0
6	3	4.1	
7	4	5.4	
8	7	9.5	
9	9	12.2	
10	4	5.4	
11	9	12.2	
12	13	17.6	高群 50.0
13	9	12.2	
14	7	9.5	
15	8	10.8	
計	74	100.0	100

「攻撃性」因子の得点分布は、0 点～15 点の範囲で、全体平均は 8.1 点。1.0 標準偏差以上の得点は 12～15 点の範囲となり高群とした。全体平均より 1.0 標準偏差以下は低群、その間は中位群とした。

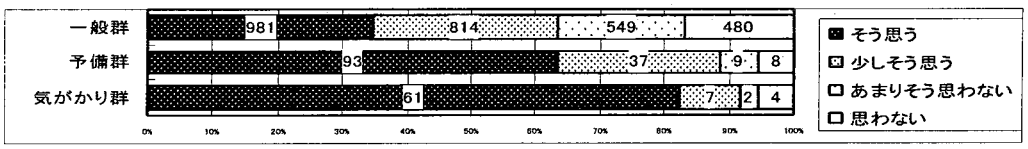
「攻撃性」因子については、15 点満点中 12～15 点の高群（攻撃性の全体平均より 1.0 標準偏差以上高い＝攻撃性がかなり高い群）の割合に注目すると、「一般群」「予備群」「気がかり群」と徐々に増えており、「予備群」はちょうど中間にある。このことから、不安感や抑うつ感が増え、自暴自棄的な感じになり、周囲の支えが感じられないという状況が強くなればなるほど、人や物に当ったり、自傷行為に向かったりしてしまうなど、まさに攻撃的な行動に出やすくなるのではないかと考えられる。

(2) 対処方法

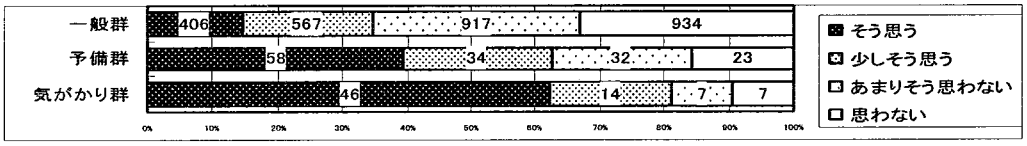
前年度、「気がかり群」の子供たちが、悩み事やストレスに遭遇した時、どのような行動をとりやすいかを明らかにしたが、その周辺にいる「予備群」や「一般群」はどうであろうか。「気がかり群」との違いはあるのだろうか。様々な対処行動について「そう思う」の回答割合に注目して、差の検定を行った結果、有意な差があると言える項目とそうでない項目のあることが分かった。

① 「一般群」「予備群」「気がかり群」の間に差がある項目

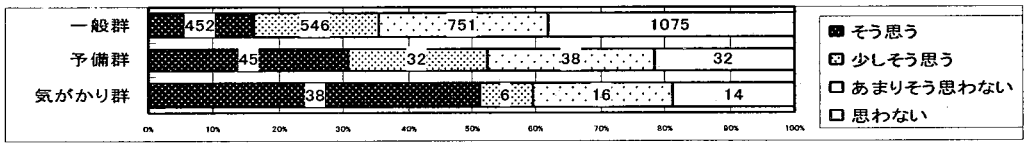
「何もしたくなくなる」



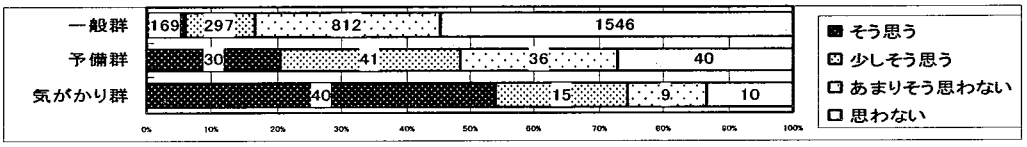
「何も考えられなくなる」



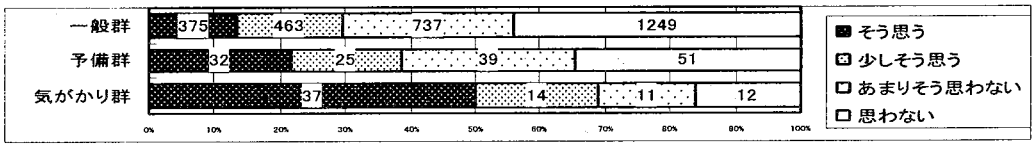
「物にあたる」



「自分を傷つける」



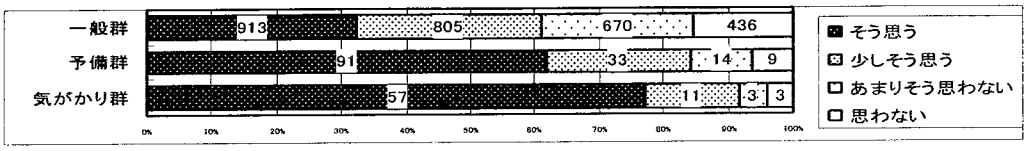
「体調がくずれる」



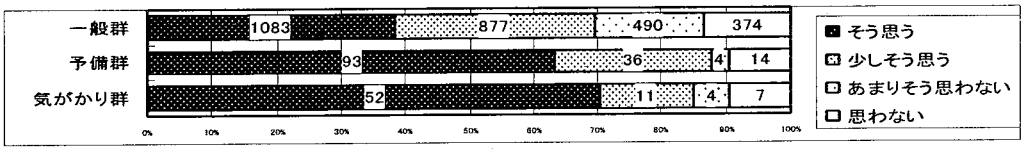
これらの5項目は、「一般群」「予備群」「気がかり群」の順に「そう思う」の回答の割合が増えており、有意な差のある項目である。この中で、「何もしたくなくなる」「何も考えられなくなる」は本人の心理的な面であり、外から見えにくいものであるが、残りの「物にあたる」「自分を傷つける」「体調がくずれる」は実際の行動として現れるものである。「一般群」ではあまり見られないこれらの行動が、「予備群」では増え、さらに「気がかり群」で一層増えるということは、このような行動が見えた時は、本人の内的状況は危機的になりつつあると考えてよい。

② 「一般群」と「予備群」に差がある項目

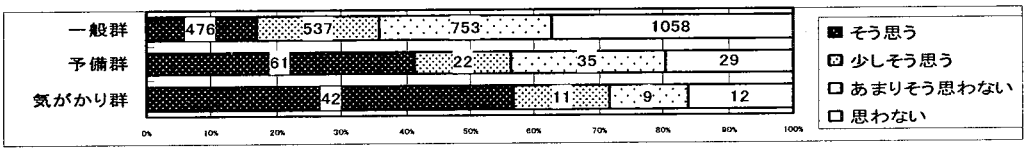
「イライラする」



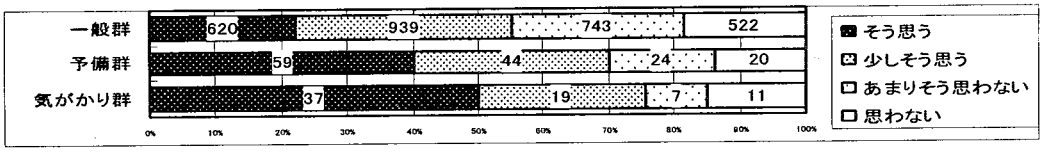
「ボーッとする」



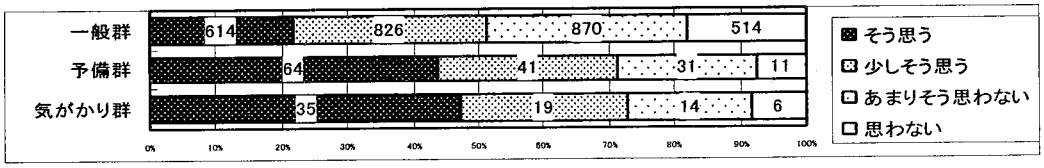
「自分の部屋にこもる」



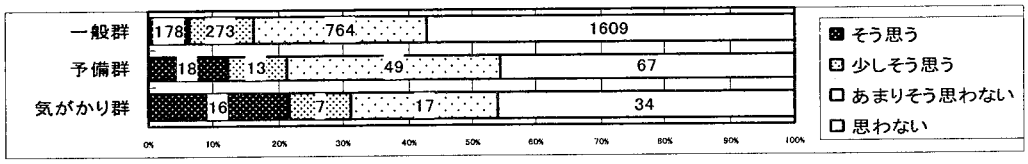
「がまんする」



「悩んでいることを人に知られないようにする」



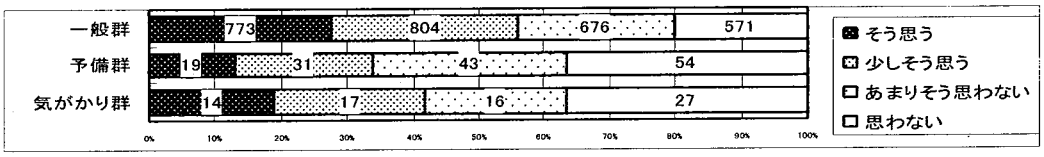
「やけ食いをする」



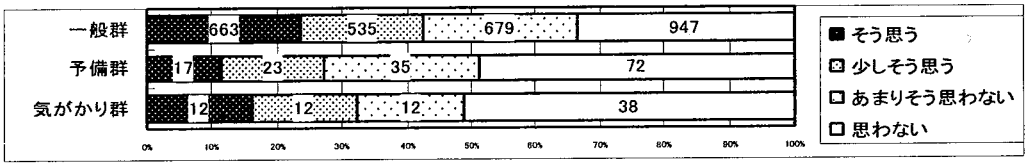
この６項目は、「一般群」と「予備群」には差があるが、「予備群」と「気がかり群」

には有意な差があるとは言えない項目である。「イライラする」「ボーッとする」「がまんする」「悩んでいることを人に知られないようにする」の項目は心理的なものであり、外側には見えにくいものである。これらの項目が「予備群」と「気がかり群」に有意な差があるとは言えないということは、「予備群」と「気がかり群」は、不安感や抑うつ感が高まり、自暴自棄的な気分が募るとともに、周囲の支えが感じられなくなると、イライラしたり、一方で、人に知られないようにしてがまんしたりという、共通した意識になると考えられる。

「誰かに相談する」



「スポーツに熱中する」

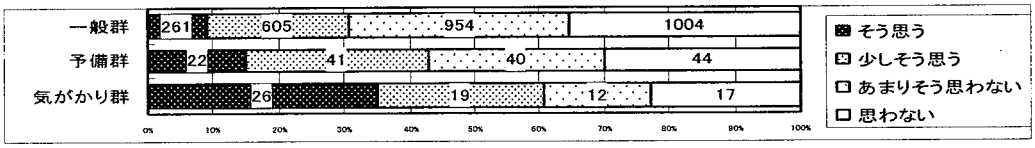


この２項目も「一般群」と「予備群」に差があるが、他の項目とはグラフの形状が異なり、「予備群」の割合だけが少ないというものである。また、この２項目は、一般的に健全な対処の仕方と言われるものである。

「誰かに相談する」という行動を、「一般群」の半数の子供たちが取るが、「予備群」の子供たちは、前述したように「悩んでいることを知られないようにする」意識が働くことから、３割にとどまるという結果になったと考えられる。また、同じように「悩んでいることを知られないようにする」意識はあっても、より追いつめられている「気がかり群」は、不安や悩みを抱えきれずに相談する場合があるということが示されていると推測される。また「スポーツに熱中する」という行動については、「気がかり群」の子供たちは、何か嫌なことを忘れたいという気持ちが働き、「予備群」の子供たちはスポーツをしようとするエネルギー自体が低下していると考えられる。

③　「予備群」と「気がかり群」に差がある項目

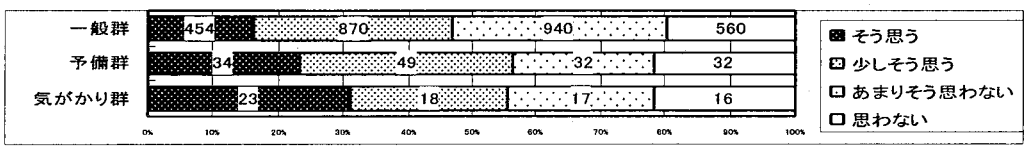
「人にあたる」



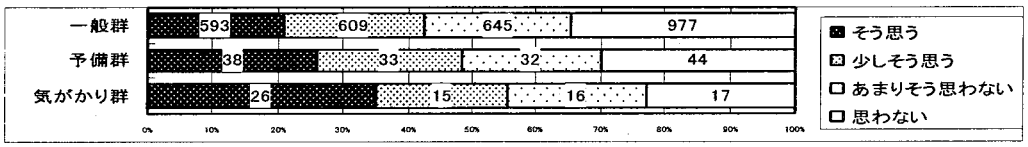
これに該当するものは「人にあたる」の１項目だけであった。攻撃的な行動であるが、物ではなく、人に向かうということは、かなり追い詰められた状態に陥っているということになる。一般的には、子供たちは不安感や抑うつ感が高まり、自暴自棄的な感じが募ってきて、周囲の支えが感じられなくなったとしても、簡単には人に向かっていくということはないと考えられる。

④　「一般群」と「気がかり群」に差のある項目

「仕方がないとあきらめる」



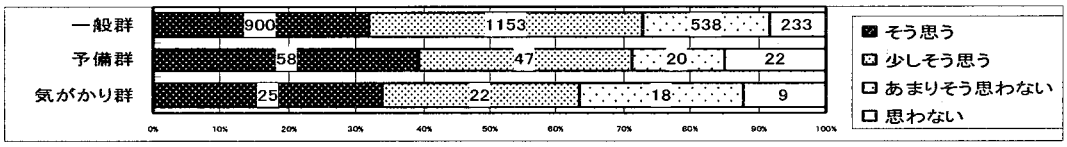
「インターネットやゲームで遊ぶ」



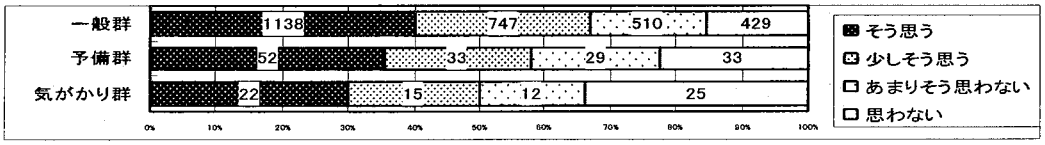
この２項目は、「一般群」と「予備群」、「予備群」と「気がかり群」には有意な差があるとは言えないが、「一般群」と「気がかり群」には差のある項目である。グラフを見ても分かるように、一般群から「気がかり群」へと、「そう思う」と回答する子供の割合が徐々に増加していく。不安感や抑うつ感、自暴自棄的な気分が高まり、一方で、家族または友達の支えが少なくなってくると、あきらめが強くなり、一人でインターネットやゲームをして気分を紛らわそうとしたり、そうすることで自分を維持しようとしたりすると考えられる。

⑤　三群ともに差があるとは言えない項目

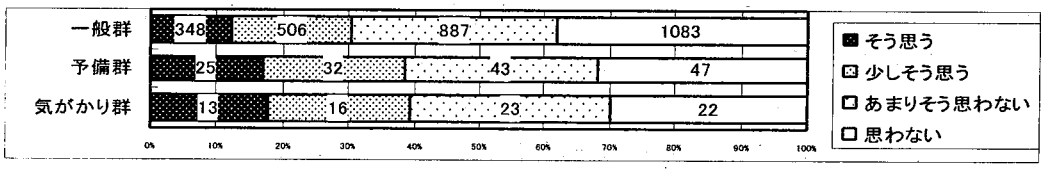
「自分でどうすればよいか考える」



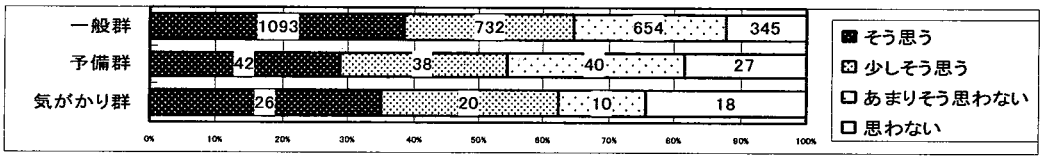
「友達とおしゃべりしたりメールをしたりする」



「思い切り大声を出す」



「趣味に夢中になる」



これらの４項目は解決行動や発散行動であるが、「一般群」「予備群」「気がかり群」いずれにも有意な差が見られず、どのような子供でも取る対処行動だと言える。

(3)　自由記述にみられる三群の様相

意識調査の自由記述欄に書かれた記述を、群ごとにまとめると以下のようになる。

「一般群」

- 「何かをやらなければと思いつつできない。ささいなことでイライラしてしまう。」
- 「たまに人生がつまらなくなる。」
- 「将来が心配。」
- 「たまに、生きているのが面倒くさくなる。」
- 「悩んでいることがあると、そのことしか考えられなくなって、どうしたらいいかわからなくなる。」
- 「最近イライラしているなと思う。」

「予備群」

- 「何もかもがどうにでもなればいいって思う。」
- 「自分なんかいなければいいと思う。」
- 「もう何もやりたくない。全部捨てたい。」
- 「最近なぜ生きているのか分からなくなる。考えても考えても分からない ・・・・・・・ 」
- 「最近、本当に楽しいと思うことがあまりない。」
- 「生きていても意味がないと思う。」

「気がかり群」

- 「『ネガティブに考えるな』って言われるけど、迷惑かけているから。」
- 「毎日が辛い、居場所がないと思う。」
- 「いつも私が悪いと言われる。だからいっそいなくなってしまおうかな。」
- 「今はいつか過ぎるから ‥‥ 今が過ぎてくれるのを待つしかない。」
- 「家にいても、学校に来ても寂しい。」
- 「悩み事があっても、家族に相談できない。」

（個人情報保護のために、記述に若干の修正を加えてある。）

ここにあげたものは、ほんの一例である。「一般群」でも当然悩みは抱えている。しかしながら、「一般群」はまだ内省している段階の印象があるが、「予備群」になると行き詰まっている印象がある。それは、「気がかり群」とほとんど同じといってもよいのではないかと思われる。自由記述を見る限り、「予備群」も「気がかり群」同様、かなり危機的な状況にいる子供が多いのではないかと考えられる。

3　気がかりな子供たちの対処方法

意識調査の結果を「一般群」「予備群」「気がかり群」に分けて、子供たちの様相について検討した。「気がかり群」ほどではないが、その前段階にいると考えられる「予備群」に注目してみた。「予備群」の子供たちは、悩み事やストレスに遭遇すると、ボーッとしたり、イライラしたりして、何も考えられなくなり、意欲が減退しやすいという、「気がかり群」とほぼ同様の傾向がとらえられた。前年度抽出した「気がかり群」よりも範囲を広げてみた「予備群」であるが、「気がかり群」と同様に心配になる子供たちであると言うことができる。そこで、これ以降は「気がかり群」と「予備群」を合わせて「気がかりな子供たち」と総称することにする。

今回の調査では、これらの気がかりな子供たちの取る対処方法は、「部屋にこもる」「物にあたる」「自分を傷つける」などの目に見える行動のみではなく、「何もしたくなくなる」「イライラする」といった気持ちであったり、「何も考えられなくなる」「ボーッとする」という状態であったりした。また、本当は助けてほしいと思っている一方で、気付かれないようにしているという意識もみられた。その点では、目には見えにくいが何らかの形で表に出ていると思われる姿を見逃さず、支える手立てを講じていく必要があると考えられる。